

まちの ほいく つうしん

第三号

二〇二〇年

十一月号



ほいくのこと

子どもたちと同じ目線で、
子どもたちと同じ歩幅で

小竹向原園では「まちって何？」
に取り組むにあたり、職員で対話を
し、歴史を大きなテーマとして、
設定しました。

幼児では、そこから更に見える化
という小テーマへブレイクダウンし、
子どもたちとの探究が始まりました。
始めは、知っていること、知りたい
ことをアウトプット。そして、知り
たいことのリサーチと、インプット
の期間を経て、アウトプットへ。子
どもたちと、自分たちの学びの見え
る化を考えました。

中心になったのは、大きな地図づ
くりです。まちのスポットを書き入
れたり、昔の写真を見ながら子ども
たち同士が対話をしたり、日頃から
お世話になっている八百屋さん「ま
ちのバーラー」にインタビューをし
たり。日々の散歩の中での様々な発
見も、子どもたちと丁寧に振り返り
しました。

「ママも小さい時は、この小学校に
行ってたんだって」
「その時ね、片付けなかったから、ばあ
ばが怒ったんだって」
「ばあばが、ママだったんだよ」

自分の家族や、自分の住んでいる
まちを知ることが、自分の周りに愛
するものが増えるということ。

「ここはセミが多い公園」
「猫ちゃんいないかなあ」
「お花が綺麗だね」
「Kちゃんママのお花屋さん元気
かなあ」



子どもたちの声に耳を傾けている
と、まちは新たな発見にあふれてい
ます。

一つのアウトプットの機会として、
行事「親子で楽しむ会」を活用する
ことにしました。この「親子で楽し
む会」は、子どもたちの成長を喜び
合う行事として毎年行ってきました。
これまではレクリエーション会の方
な形で一箇所に皆で集まって楽しん
でいましたが、このコロナ禍では新
しい形を考える必要がありました。

そこで考えたのが「親子で楽しむ
（まち歩き・スタンプリング）」です。
子どもたちの学びのプロセスや声を
記録したドキュメンテーション、写
真、子どもたちがまちを表現した絵
などを、園内や地域に展示。日々、
子どもたちが散歩で親しんでいる場
所を巡りました。

行事のための活動ではなく、子ど

もたちの日常的な興味関心に保護者、
地域、職員が継続的に寄り添う。そ
して、その学びのプロセスの見える
化を、大人だけが主導するのではな
く、子どもたちと一緒に考えること
ができた。これは、子どもたちだけ
でなく私達職員にとっても大きな喜
びでした。このまちの探究はこの日
で終わるものではなく、これからも
更に深化していきます。

子どもたちの学びを、まちにも更
に還元していきたいと思っています。



保護者と

つくる

よよぎうえはら

こどもも、おともも、主人公に

「あの子、こんなに絵を描くんだ、知らなかった」。保護者と一緒に、アートのワークショップを行っていた時のこと。参加していた一人のお父さんが、我が子のクラスメートの描画を見てぼそりと呟いた、忘れられない一言です。

自由でクリエイティブな空気に満ちた代々木上原のまち。上原園でも開園以来、保護者の皆さんと一緒にユニークな活動を行ってきました。例えば、園庭の小屋作り、英語の絵本読み聞かせ定期開催、音楽会、水墨画ワークショップ、アニメーション上映会、アートワークショップ、春巻づくり、洋服作りの実演、カルタ大会、モンスターマスクワークショップ……。

こういった活動は、まずは子どもにとって豊かな体験になることを願って実施しています。しかし冒頭の保護者の言葉を聞いて、「保護者も主体だ」ということに改めて気づかされました。保育の世界に少し入って、子どもたちと時間を過ごすことは、参加する保護者にとっても素晴らしい経験になりうるのではないかと。私達はそんな仮説を持っています。

日頃保護者の皆さんは、「我が子」を通して、園やお友だちについて知ることが多いと思います。しかし、園の活動に保護者が一人の主体となって関わる時、我が子以外の子



どもとも一対一の関係で向き合うことになります。そこにはきつとたくさん発見があります。興味も発言も、得意不得意も千差万別な子どもたち。その輪に入って一緒に遊んでいると、「我が子と比べて」「我が子に対して」という視座から否応なしに解放され、子ども一人ひとりのむき出しの面白さに対面します。

子どもから放たれる無限のクリエイティブに触れ、参加している大人たちもいつの間にか、子どもに負けないぐらいいい表情になったりします。

こういう時間の積み重ねの上に「みんなで育てる」まちが生まれ、「ともに育ち合う」関係が培われるのだと思います。



園紹介

第三回

まちの保育園 吉祥寺

認可保育所
二〇一四年十月一日 開園
定員六〇名

まちの保育園 吉祥寺は、武蔵野市吉祥寺駅と三鷹駅の中間にあります。六十名のアットホームな園で、こどもたち同士も交流を持ちやすく、お互いのことをよく知っています。園内にはコミュニケーションスペース（カフェ）があり、その中心には暖かな薪ストーブ。こどもたちも薪割りに参加したり、火入れを担当したりと日々の生活の場となっています。天井までの本棚には絵本がいっぱいあります。

武蔵野市は地域に根付き、活動をされている方が多いように感じています。市民団体の方に土作りを教えていただいたり、高齢者施設に定期的に出かけたり。園舎の裏には小学校があり、卒園児が進学したり、定期的に小学生と幼児との交流の機会もあります。井の



頭公園も近く、動物園も日常的に訪れています。

保育の中で大切にしているのは、季節の移ろいを感じながら、実体験として自然に触れられる機会です。保育園での経験が、家庭での会話に広がり、土作りから行なって収穫した野菜を「家庭・地域の方と喜び、食事を囲んだら。日々、たくさんの人に支えられていること、守られていることを感じ、感謝や思いやりの気持ちが育んでいきたいと考えています。

また、もう一つ強く意識をしているのが、一人ひとりの想いを受け止めること。だだこねも、イヤイヤも、存分に出してもらい、こどもの姿にはどういった意味があるのか、こどもたちの気持ちに寄り添いながら向き合っています。

キッチンと

つくる

ろっぽんぎ

六本木園は本園と分園に分かれており、本園で乳児、分園で幼児が生活をしています。

キッチンも二箇所、栄養士もそれぞれに常勤していることから、食により力を入れられるのが、園の大きな特徴です。

本園では乳児に適した味付け、切り方で調理をすることはもちろん、慣れ保育の期間に離乳食試食会を行ったり、ご自宅での食事の様子の聞き取りや園での食事の様子から、食が細い、野菜を食べない、などの



お悩みにアドバイスをさせていただいたりもしています。

分園では幼児の食育活動に力を入れています。このコロナ禍で活動にやや制限もありますが、子どもたちに近隣の八百屋さんへ食材を買いに行ってもらい交流をしたり、子どもたち自身がお米の脱穀を体験したり。分園の中心にキッチンがあることで、子どもたちとの距離も近く、自然な関わりの中から、食に興味を持っているのではないかと思っています。

もう一つ、六本木園の食で大切にしているのは出汁です。厚削りの鰹節と昆布で、毎日じつくりと。故郷の味とは少し違うかもしれませんが、子どもたちにとって園の出汁の味が、大人になった時にふと思い出す、おふくろの味のような存在になれたら嬉しいですね。



地域と

つくる

よよぎこうえん

温かくてやさしい、原宿ローカルな繋がり。

まちのこども園代々木公園は、都立代々木公園の中にある園です。開園から三年。この場所ならではの地域との繋がりが生まれています。その中でも、公園と商店街との繋がりについて、少しご紹介します。

まずは代々木公園。一番近くで子どもたちの育ちや興味を共有するパートナーとして、お付き合いをさせていただいています。公園の豊かな自然について専門の方にお話を伺ったり、有事に備えて毎年防災訓練を合同で行ったり。このコロナ禍で四月に代々木公園が封鎖になってしまった際には、保護者、子どもたちの負担をできる限り軽減できるようにと、園に寄り添い一緒に対応を考えていただきました。本当に有り難い限りです。

次に商店街。原宿の真ん中ではありますが、地域には穂田商店街という商店街があります。元々は給食の食材はなるべく地域のお店からという想いで、関係が始まったのですが、今では日常的なお付き合いだけでなく、商店街のお祭りにも協力団体として参加をしています。

今年は、このコロナ禍でやや活動が制限されていますが、いつもお米を納品してもらっている商店街の精米店さんと六月から屋外でお米を育てる取り組みをしています。毎月園に来て稲の様子を見てくださったり、子どもたちも稲の様子で心配な



この他にも、お隣の明治神宮、表参道の榎会さんなど沢山の方に日々支えていただいています。コロナにより形はかわったとしても、子どもたちの学び、育ちにおける地域との繋がりは欠かせないものになっています。柔軟に、今だからこそできることもあると思うので、対話と共有を大切にしながら、いっしょに考えていけると良いなと思っています。

まちの保育園・こども園の 人気レシピ



第3回 六本木園 「ブリ大根」

大人1人+子ども1人分
もしくは、子ども2人とちょっと。

＜材料＞
ぶり：40g × 5切
酒：小さじ1
塩：少々
大根：120g

A
出汁（かつおこんぶ）：250cc
生姜：小さじ1/2
砂糖：小さじ1
酒：小さじ1
醤油：大さじ1
本みりん：小さじ1

＜作り方＞
①大根は厚めのイチヨウ切りにして、柔らかくなるまで茹でておく。
②ぶりに塩と酒を振っておく。
③鍋に出汁、Aの調味料、茹でた大根を入れて煮立てる。沸騰したらキッチンペーパーで水気を取ったぶりを入れて20分ほど煮て出来上がり！

※煮汁は大根とぶりがかぶるくらいの量が良いです。鍋の大きさによって変わってくるので、具が浸らなかったら同じ割合で増やしてみてください。

保育園 Point
汁は煮切るとしょっぱくなってしまいますので、煮切らずさらに盛るときに汁も入れてあげると子どもでも食べやすいです。





節目の年を迎えるにあたり、この一〇年を振り返ってみる。

私が「まちの保育園」をつくる大きなきっかけとなったのは、二〇〇一年ワタリウム美術館でのレッジョ・エミリアの展覧会でした。その後一〇年を経て、二〇一一年「まちの保育園」が誕生しました。そして、来年二〇二一年は、ありがたいことに、「まちの保育園」が生まれてから一〇周年の年となります。

想いが溢れ、前編・後編と分かれた長文になってしまったのですが、今号と次号では、来年、節目の年を迎えるにあたり、この一〇年を振り返らせていただきたいと思います。この一〇年はたくさんの方々と、子どもたちとつくった一〇年ですから、園に関わってくださった皆さんと、一〇年の編集を進めていきたいと考えているのですが、まずは僥倖ながら、私の視点から書かせていただきたいと思います。

園づくり、文化づくり

二〇一一年

四月にまちの保育園 小竹向原が四〇名の定員で開園。基準は満たしていても、新法人では認可が下りず、「東京都認証保育所」としてスタート。それでもカタチになったことに感謝は尽きなかった。現実には想像以上だった。自身の根っこから来ているからこそ、激しく落ち込み、よろこびは至上のものであった。しかしそれに浸ってもしられない。施設規模維持や自分たちが目指す保育追求のため、補助金のみでの運営では厳しくいろいろなしごとをした。保育もコミュニティの文化もつくりながら駆け出すことになる。持続可能性のため、経済的な意味でも、教育や文化的な意味でも「三園構想」を持ち始める。その中、「まちのパラー」はいつも隣で勇気をくれていた。ワタリウム美術館でレッジョ・エミリアの

第二弾となる展覧会を一〇年ぶりに開催。そちらに協力もさせていただいた。

二〇一二年

引き続き、保育やコミュニティのあり方に奮闘の日々。その中、ありがたいことに、私たちの園のあり方に興味を持っていただき、港区の新しい開発の中で、新園を開園することになった。しかも「認可保育所」の形態の許可が下りた。よい出会いもあり、一二月に六本木の園（現・本園）が開園。小竹向原で私が担っていた役割が、新園にも必要と考え「コミュニティコーディネーター（CC）」と定義した。

二〇一三年

言うまでもなく文化づくりは生半可なものではない。二園になると、どこを共通にするべきで、どこがそれぞれの個性なのか、まちの保育園のアイデンティティに向き合うことになる。チームは、みんな真剣。私の日々の参加と判断が求められ続けた。その中、いわゆる「待機児童問題」の流れもあり「三園構想」の三園目となる、武蔵野市の吉祥寺で開園の準備が始まる。「まちの保育園」とは何かを問い続けた。一人ではなく、チーム・保護者の参加がありがたかった。子どもたちにも希望をもらった。やや手狭であった、六本木園は「分園」の場を借りることができ、園を拡張することが決まった。その準備も並行した。

二〇一四年

開園は大変なエネルギーを使う。二園の園づくりを進めながら、新園の準備を行うことは、苦難の連続であったが、仲間、コミュニティに支えられ、何とか四月に六本木分園、一〇月に吉祥寺の新園が開園した。また、この年、小竹向原が三年間の運営実績から「認

可化」が内定。定員増のため増築することになり、その準備も進めた。一月には、六本木に「まちの本とサンドイッチ」がオープンした。

二〇一五年

四月に小竹向原が認可保育所としてリニューアル。「三園構想」はかたちになった。自身の役割も小竹向原にCCが来てくれたことで、園の代表としての仕事に集中しやすくなっていった。園の個性を大切にしながら、園間の連携を活発に行っていた。この年、政府官邸で「一億総活躍国民会議」が立ち上がり、「保育」がこの国の重要なイシューと位置付けられた。何の流れか、私が会議に参加させていただくことになった。そこで、私たちが現場で向き合ってきたことは、社会全体にも言える課題やテーマなのではないかと考えるようになる。子どもの持つ力や可能性を、もっと社会にも届けたいと思うようになった。

ここまでで五年分。一園目の開園から、園づくり・文化づくりに必死で向き合い、悩み、つくってきた、本当に濃密な五年間でした。関わってくださった全ての方に、改めて感謝の気持ちを強くしております。誌面が尽きてしまいましたので、後半の五年分は次号へと。長文になりました恐縮ですが、よろしければもう少し、お付き合いください。

来年はマスク越しではなく、皆様にお会いできますように。

まちの保育園・こども園 代表 松本理寿輝



まちの
ほいく
つうしん

「まちのほいくつうしん」について

「まちのほいくつうしん」は保護者の皆さんと、地域の皆さんと、私たちに関わってくださっている全ての皆さんと、いっしょにつくっていききたいと思っています。取り上げてほしいこと、お気づきの点、ご感想などがありましたら、お気軽にお寄せいただけますと幸いです。よろしくお願いいたします！

発行日：2020年11月30日 編集・発行：ナチュラルスマイルジャパン株式会社 まちの保育園・こども園 アートディレクションとデザイン：Donny Grafiks
ナチュラルスマイルジャパン株式会社 本社部門 〒176-0004 東京都練馬区小竹町二丁目40番4 E-MAIL：machihoiku@machihoiku.jp TEL：03-6447-4471
©NATURAL SMILE JAPAN, Inc. 2020 Printed in Japan